

“かたまり”づくり

飯島俊勝

幼児教育の世界に入ってまだ一年余、やっと二年生になった所である。しかし、幼児教育の世界に入った、といっても、家で保育園をしているので、事務でも手伝おうかと、軽い気持ちからである。そんな新参者のまわりで展開しているのは、新しく、見、聞きすることばかりである。

幼児教育とは、保育とは、そして、その教育、保育の理論とは、倫理とは、又、人間の習慣から、民族の慣習からいうところあるべきだ等、多面的にいろいろ説かれているが……。さて、何が教育であり、保育であるのだろうか。学問的に問われると、何もわからない。保育原理を学んだわけでもない。幼児心理学を学んでもない。学生時代、応用化学で窯業を少しかじって、仏教の真言学を専攻し変った道を歩いただけである。そんな目で見た子どもたち。四年前から全面的に「自由保育」といわれている形態をとり始めた園の子どもたち。

私の園は、保育園である。創立二十三年目を迎えたのである。「子どもたちの為に」と一生懸命の二十三年目であるが、「自由保育」の形態を取り入れてからが真の創立になるのかも知れない。

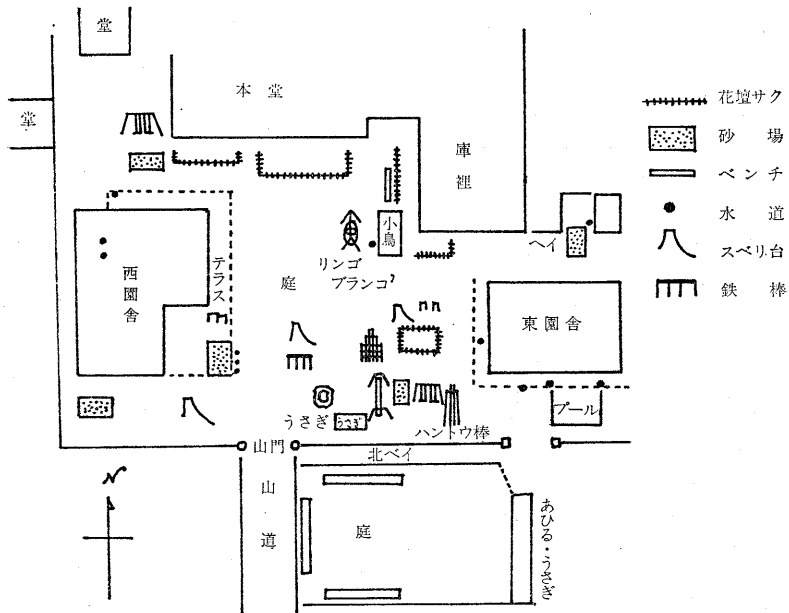
保育園と幼稚園とは、管轄省の違い、法律・制度の違い等はあるが、その園で保育されるのは、どちらも子どもたちであるということである。しかし、その同じ子どもたちに保育する保育内容が、著しく異っているらしいのはなぜなのだろうか。

こうしてみると、不勉強から出てくる疑問が非常に多いわけである。しかし、この疑問点の答は、「……であるからしょうがない」「……の規則になっている」という答を聞かんが為の疑問点でもなく、勉強をしたいわけでもない。保育者の観念的な考えで、制度、規則があるが為に、子どもに不幸な保育をしなければならぬ。あるいは、子どもに保育するが為に、かえ

って不幸にさせてしまう保育をしている保育者が、いかに多いのではないかと思われる。まずは、子どもが王様、主体であることを忘れてはならない。行政の為、保育者自身の労働問題の為に、子どもたちを犠牲にしてはいけないのである。特に、園でピアノを教えています。英語を教えます、等々……保護者の弱点を利用する保育というのか、そんな経営をしている園もあることを憤慨する思いで見、聞きするのである。

第一には、自分たちで改めることのできる、保育者の保育に対する、子どもに対する姿勢のあり方の勉強をしたいわけである。これは、ルール、モラルをわきまえた良き一人の社会人であることの勉強であり、「先生」という言葉の上にあぐらをかいている自分を見つめ、それを取り払うことでもあるような気がする。保育する以前に、自分が真の先生になるべく切磋琢磨することである。そして、福祉をしますといいながら福祉を食いものにし、先生をしますとって、先生を食いものにならないことである。

園は、寺院の境内に建てられている。南側は土壁であり、園庭は外部の道より一・五メートルほど高くなっている。園舎は拡張により西園舎と東園舎とに別れている。寺の敷地内の既成



された場所にできた園だけに、園庭は非常に変形している。その外に山門があり、山道（幅十二メートル、長さ百メートル）があるが、これが結構園庭の役目をしてくれる。寺であるので、木は大きな老木がしんしんと繁っており、これが良い木陰を作ってくれる。

今、園で盛んに行なわれている遊びは、水遊びが多い。水を利用しての砂場での、ダム、池作りである。五歳児においては、プールでの水遊びがあるので、より多く日光浴ができるように、九時には水着に着替えて、園庭ではビーチゾウリを履いて遊ぶ。この姿になると、ますます、砂場でのダム、池作りは盛んとなる。三、四人で始まるわけである。時には人数はだんだん増えるのである。やがて子ども同士で、

「今日は○○ちゃんは水汲み当番だよ」

「××ちゃんも」

と、役ぎめから始まる。すると水汲みに当った子は、ジョロに水を入れて砂場に運ぶ。運んできて川に当る？ 所から水を流す。始めは砂が乾いているので水はすぐ染みてしまう。が、やがて水汲み当番は、せかされて何回か運ぶうちに水が溜まりだす。すると、子どもたちの心に余裕ができるのか、いろいろ

な会話が始まり、直接今している遊びに関係ない会話までが始まる。一方では水汲み番は、スクータにジョロを乗せて運び、「水まき車がきました」と。又一方砂場の中では、A君の誕生日だったのだろうか、こんな会話が、

A君「今日、僕の誕生日なんだ。お母さん街へケーキを買に行っているんだ。○○ちゃんも、××ちゃんも、僕んちに来て遊ぶんだよな」

B君「Aちゃん、僕も行ってもいい？」

A君「うん、いいよ。おいだよ」

B君「それじゃいくよ。プレゼント持って行くよ。でも、何がいい」

A君「なんでもいいよ」

B君「お姉さんの、きれいな折紙をもらってプレゼントに持って行くよ」

A君「それじゃアカードを上げるね」

砂場の横の遊動木に、他の子と乗りながら聞いた会話である。

大人と言葉は異なるが、会話自体は、大人と全く同じであり小さな社会ができあがってきている。当然、その小さな社会には、幼児なりのルールもできあがってきてるし、また、人間関係で大切な協調性等も遊びの中から育っていつている。

園児の間でもう一つ、おもしろい遊びが流行っている。これは、「カタマリ」作りである。砂の「カタマリ」を作るのである。いわゆる砂の「ダンゴ」である。しかし、園児たちは、「ダンゴ」とは言わずに「カタマリ」という。それは、園庭の上部層の荒い砂を除き、その下の細かい砂を手のひらで集め、口に含んだ水でぬらし、固めるわけである。その「カタマリ」に乾いた細かい砂を何度もかけて、手の中で上手にまるめるわけである。ピカピカに磨き上げるわけで、それを大事に持って、その光り具合を友だち同士でくらべるのである。この「カタマリ」作りは、八年前頃から、園で代々伝わっている遊びである。それが昨年の始め、砂場のプラスチック製の小さなコップの中にしめた砂を一杯に入れ、上面を磨き上げて「カタマリ」を作る行動がみえだした。必然的に、みんなが砂場のコップをほしがる。コップの数には限りがある。すると、回りにある砂が入る用器は全ての物が、コップの替りとなってしまふ。砂場のシャベル、おやつ後のヤクルトの用器、ビンのキャップ……。その中では、ビンのキャップが、一番子どもたちには好まれた。キャップを使つての「カタマリ」作りは、それが、子どもの中に丁度入る手頃の大きさの為か、あつという間に園中の子どもに広まってしまった。どの子どもものポケッ

トの中にも必ずというくらいに、いくつかのキャップが入っている。その中の二、三個のキャップには、「カタマリ」があがっている。でき上つた「カタマリ」は、家庭に持つて帰る。園のキャップは、減る一方で、私が飲むビールではたりやしない。そんなことで、先生のキャップ集めは大変であつた。一時は、食堂からキャップをいただいたものである。この「カタマリ」作りが、最大に加熱した時には、家庭でも「カタマリ」作りは行なわれ、しかも、保育園の砂でなくては良い「カタマリ」ができないと、ビニール袋に園の砂を降園の時に持つて帰る子どもが多くなり、「保育園の園の砂がなくなつてしまふから『カタマリ』は保育園で作らましようネ。お砂の入つたビニール袋は、自分の下駄箱に入れておき明日またしましよう」といつたくらいである。又、家庭では知らずに子どもの衣服の洗濯をして、ポケットに入つた「カタマリ」で、一緒に洗つた物が泥だらけになつてしまつて困つた話も、母親たちから聞く始末である。しかし、子どもたちはそんな事にはおかまいなし。着ている衣服も砂だらけにしての「カタマリ」作りである。その「カタマリ」作り子どもたちの作業を見てみると、単純と思われたその作業は、いろいろな作り方のある事を発見する。

①しめった砂をキャップにつめる。

②キャップの中に水を入れておき、そこに乾いた砂を入れる。

③キャップの中に砂を入れておき、そこに水を注ぐ。

最初にキャップで「カタマリ」を作り始めたころの子どもは、大部分が①であった。(用器を使わずに作るには、しめった砂をまず作らねばならなかったことからであらう)

②は、水道の水をキャップに入れて砂のあるところまで運んで作る。しかし、運ぶ間に水がこぼれやすくて作るのがむずかしいようである。

③は、砂をキャップに入れて水道の蛇口の所にいき適度の水を入れる方法を考えたしている。

もう一歩進んだ子どもたちは、砂のある所に他の入れ物に水を汲んでもっていくか、あるいは、口に水を含んでいって口からキャップの中に水を移す方法で作ることを見いだしている。

各々子どもたちの工夫によって、いろいろな「カタマリ」の作り方が考え出され、又、友だちの作るのを見て、こんな作り方があるのか……と、学んでいる姿が見うけられるのである。

又、この「カタマリ」作りでは、こんな事も知らずに学んでいる。それは、雨の降った後は、雨水で流された砂が最後に集まる所に細かな砂があることを。又、小雨が降った後には、園庭

のどこに行けば乾いた砂があるか等……。一つの遊びから友だちの行動、自然の観察等、多くのことを学んでいる。特に、「カタマリ」に対する親愛の情は、作り方の仕上げの作業でみる事ができる。砂を何度もかけて光りだした「カタマリ」を、より磨く為に、つばきをつけてこすり、又、細かい砂をかけ、スポンにこすりつけて磨く。磨き上がったキャップの表面を、頬にこすりつけたり、人差し指びで感触を味わったりしている姿で。

この姿は、「カタマリ」を通して、大自然を構成している五大(地・水・火・風・空)の中の、地に対する興味を、子どもなりに十分肌で感じているのではないだろうか。こんなすばらしい「カタマリ」作り。子どもの最高の芸術作品とも思われる「カタマリ」。単なる「泥あそび」といって、又、よごれるからといって、けしてやめさせる事はできないと思われる。

次の世代の為に、現場にある我々は、保育テクニク、理論等よりも、自分自身の人格の形成、又、幼稚園、保育園に出せば子どもは良くなると思っている家庭への、反省、教化が大事であるような気がする。

(芙蓉保育園)